ピアノ初学者の音楽基礎力向上を目指して

－機能和声感を習得する手がかりを探る－

Aiming at Improving the Basic Foundation of Music for Beginners of Piano:

Exploring Clues to Acquire a Sense of Functional Harmony

南谷 悠子

Yuko Nanya

〈摘　要〉

本稿は保育者養成校のピアノ初学者の音楽基礎力向上をねらって、機能和声感を高めるために身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行い、機能和声感が高まるかどうかを検証したものである。事前調査では、Ｔの機能を感じ取ることができた学生は20%であったが、身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行った後の調査では、73%の学生がＴの機能を感じ取ることができていた。同様に、Ｓの機能は77%から86%へ、Ｄの機能は57%から76%へ伸びていた。また和音の機能について、事前調査では32%の学生が一定の理解ができたと回答したが、身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行った後の調査では、82%の学生が一定の理解ができたと回答している。これらの結果から、身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行ったことは、機能和声感の高まりに一定の有用性があったと考えられた。また、机上のみでの学びでは、音楽理論の知識は理解しにくいことも考えられた。機能和声の理解がより高まる手だてを考えること、そして理論とキーボード・ハーモニーを有機的に結び付け、演奏につなげる方法を模索することを、今後の課題としたい。

〈キーワード〉機能和声　主要三和音　キーボード・ハーモニー　カデンツ

Ⅰ．研究の背景

１．本学のカリキュラム

保育者養成校において、ピアノ未経験者及びピアノ初学者に対してどのように音楽の基礎を身に付けさせていくかが喫緊の課題となっている。本学子ども学科入学時にピアノ経験の有無について調査を行っているが、平成28年度入学生は、ピアノ未経験者43%、平成29年度入学生は、同じく55%、平成30年度入学生は、同じく33%である。直近の3

年間ではピアノ未経験者は大体3割から5割位で推移している。ピアノ未経験者のうち、半分ほどの学生は吹奏楽部であったり、合唱部であったりと何らかの音楽歴がある。しかし、残りの半分の学生については、どうやら初等中等教育においての音楽科の授業まで記憶をさかのぼらないと、音楽的な活動を行った憶えがないようである。しかしながら、音楽を嫌いだと言い切る学生は見当たらない。本学入学時にピアノ経験の有無について聞くと同時に、「音楽が好きか」についても尋ねることにしている。結果は、「とても好き」「まあ好き」に○を付ける学生がほとんどである。また、「どんな活動が好きか」については、「聴くこと」と回答する学生が多く、次に「歌うこと」「演奏すること」の順に回答されている。このことから、音楽科の授業以外で音楽活動は特に経験しなかったが、「音楽を聴くことは好き」というピアノ未経験者が毎年一定数いることが浮かび上がる。

本学は、3年制の短期大学である。1年次より「音楽基礎」という授業が始まるが、音楽の土台づくりを行う授業であり、ピアノ未経験者及びピアノ初学者がピアノという楽器に慣れていく大切な演習科目である。「音楽基礎」は本学のカリキュラムでは選択科目[1)]であるが、学科の学生全員が履修している。授業の構成は、おおよそ初めの30分間でソルフェージュ[注1]や楽典[注2]を行い、その中でキーボード・ハーモニー[注3]についても行っている。残り60分間でピアノや弾き歌いの指導を行っている。「音楽基礎Ⅰ」の到達目標は、「基本的な楽譜の読譜力を身につける」及び「簡易伴奏のついた子どもの歌を弾き歌いできるようにする」である[2)]。「音楽基礎Ⅱ」の到達目標は、「音楽基礎Ⅰ」の到達目標に加え、「簡単な旋律に簡単な伴奏をつけることができる」である[3)]。つまり、後期に開講される「音楽基礎Ⅱ」においては、「音楽基礎Ⅰ」よりもキーボード・ハーモニーの演習は増えていく現状にある。そして、1年次の「音楽基礎」で培ったピアノの基礎的な奏法及び弾き歌い技術は、2年次の「音楽表現」において子どもの歌のレパートリーを獲得していく上での土台となっている。

2．問題の所在

1年次開講の「音楽基礎」及び2年次開講の「音楽表現」において、ピアノの指導を行う中で毎年様々な問題が散見される。本研究のテーマである機能和声感[注4]に関する問題としては、まず、曲の構造を理解しておらず、和音の表情を十分に感じ取って演奏することができない。例えば、V→IやV$_7$→Iを音楽的に弾くことができない。次に、学習が積みあがらない。学習が積みあがらない要因としては、音楽をまとまりでとらえられないことにある。縦で読譜をし、例えば左手のドソミソを毎小節にわたり書き込んでいるのである。ドミソの和音だと気づけないため、縦の演奏になってしまい、音楽が横に流れず音の羅列となってしまっている。そして、練習をコツコツできないこと。これはカデンツ奏[注5]を事例に挙げ説明したい。カデンツ奏を授業で行い、試験にも取り入れ、その時は練習するのだが、試験が終わるとやらなくなる。主要な調であるハ長調・ト長調・ヘ長調の楽曲

でも、毎回伴奏を受け持つ左手の音を読んでいる。それは、カデンツ奏が主要三和音（スリーコード）[注6] の和音だということに気づけないということである。また、例えばハ長調の楽曲において、ⅣとⅤ(7)が混ざってしまい、「シファラ」を弾いてしまう事例も見られた。練習をコツコツと継続できない学生は、学習が点と点になってしまい、線としてつながっていかないように見受けられる。ピアノ学習につまずく学生は、1年次の「音楽基礎」の段階から学習が積み上がりにくい現状がある。「音楽基礎」において、確実に音楽の基礎を身に付けさせ、「音楽表現」へとつなげる必要がある。学習が積み上がりにくい学生、意欲が低い学生について、どのようにアプローチし課題設定をしていくか、そして一斉で行う部分の授業計画が重要であると考える。

Ⅱ．教材「こいぬのマーチ」とカデンツ奏

子どもの発達に合わせて伴奏を柔軟に工夫していくことは、子どもの豊かな表現につながると考えられるため、鍵盤上で和声[注7]を学ぶキーボード・ハーモニーを行っている。メロディー（旋律）・リズムとともにハーモニー（和声）は、音楽の三要素として大切な要素である。しかし、保育を志す学生にとっては理解することが難しい内容でもあると考えられる。そこで、「音楽基礎」内の前半部分において、教材「こいぬのマーチ」[注8] を用いた（図1）。まずは、右手メロディーを弾けるようにするのであるが、前半8小節は基本のポジションに手を置けば弾くことができる。次に、階名唱をしながら行う。左手は、単音→重音→和音の順に提示し、和音が取れるようにしていく。なお、左手の伴奏は「Ⅰ」と「V_7」でできている。この教材は、子どもの歌の歌詞をつけて弾き歌いをしていく前段階の練習という位置づけで行っている。前半8小節について十分に慣れたと判断したら、後半8小節についても取り組む。右手は9〜10小節と13〜14小節で基本のポジションから少しずれることと、和音は「Ⅳ」が入る点が前半8小節とは異なる。全16小節を弾くことに慣れてきたら、和音記号からコード・ネームへと結びつけたり、左手を伴奏形にしたり、と展開していくことができる。

ハ長調・ト長調・ヘ長調で行っているが、いずれの調も指づかいはまったく同じである点がポイントである。指の都合や黒鍵があることにより、指づかいが気まぐれであってはならない。また、実習においては、子どもの様子に目配りしながら弾き歌うことが理想であるため、「和音を手の感覚でとらえる」こともねらいの一つである。そして、余裕のある学生に対しては、「よそ見をしながら弾く」ことを勧めている。子どもの様子に目配りしながら弾くことができるよう、楽譜や手元を見ないで弾く練習も必要だと考えられるからである。五味ら[4)]によると、幼児教育用の楽譜集に出てくる調は、ヘ長調・ハ長調がきわめて多く、ついでニ長調が多い。変ホ長調とト長調は1割以下であると明らかにしている。このことから、保育を志す学生は、4〜5つの調に慣れておくことが重要であるとい

える[注9]。

合わせてカデンツ奏も行っている。「和音を手の感覚でとらえる」ことと「機能和声の理解」を深めるためである。① Ⅰ→V_7→Ⅰ　② Ⅰ→Ⅳ→Ⅰ　ができるようになったら、③ Ⅰ→Ⅳ→V_7→Ⅰを行っている。高山[5]は、「属七の和音は、楽曲内での使用頻度がⅤよりも高いため、ピアノの初学者にも属七を用いての伴奏を学習初期の段階から課していくことが望ましい」と提言しており、石田[6]は、「バイエル終了程度では、Ⅳ－Ⅴへ移行する際の運指に慣れるまでに時間を要する。むしろ、Ⅳ－V_7に移行する方が、2の指（人差し指）の移動がないため弾きやすいと思われる」と述べている。カデンツ奏ではあえてⅤは取り扱わず、個人レッスンにおいて、ピアノ小品や弾き歌い楽曲内にⅤが出てきた場合は解説をしている。カデンツ奏でⅤを入れない理由は、ピアノ初学者が多いことから、ⅤとV_7の混同を避けるためである。

鷲野[7]は、子どもの歌41曲を分析し、その結果85%がトニカ、サブドミナント（Ⅱは含めていない）、ドミナントのスリーコードで構成されていることを明らかにしている。子どもの歌は、機能和声に基づいて作られた音楽である。シンプルな構成で出来ており、よく用いられる調について、和音を手の感覚でとらえ、主要三和音についての機能を理解して演奏することは非常に大切であると考えられる。

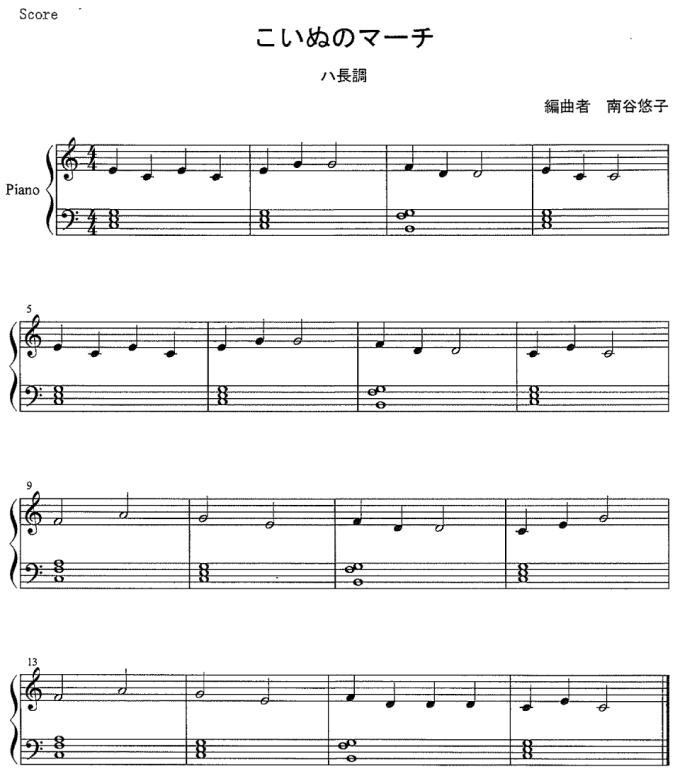


図1　こいぬのマーチ ハ長調の楽譜

先行研究では、保育者養成校の学生について、機能和声の理解の現状を明らかにしているものは少ない。本研究のテーマに関連する研究として、西田[8]は、コード・ネーム主導の弊害について述べ、最初から調や和音機能についてしっかり学習するべきであると論じている。砂田[9]は、和音記号とコード・ネームについて整理し、機能和声による伴奏法を主体とし、コード・ネームによる伴奏付けを併用するのが最良であると主張している。また、高山[5]は、機能和声の理解とカデンツ奏を習得することで可能となる主要三和音による伴奏法を提示している。そして、五味ら[4]は、子どもの歌の分析から調性分類を明らかにし、鷲野[7]は、子どもの歌について85%が主要三和音でできていることを明らかにしている。

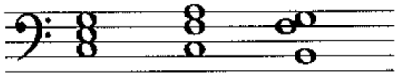
本研究の目的は、ピアノ初学者の音楽基礎力向上をねらって、機能和声感を高めるために身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行い、機能和声感が高まるか検証することとしたい。和音の機能を理解し、主要三和音を手の感覚でとらえることが、音楽基礎力の向上、そして音楽的な演奏へとつながり、子どもの豊かな表現を育むと考えるからである。

Ⅲ．方法

1．調査方法

平成29年度の後期授業「音楽基礎Ⅱ」内において、楽典「和音」を学んだタイミングで事前調査を行った（対象者30名）。まずは、調性の提示を行う。内容は、調性（ハ長調）を口頭で伝え、音階とカデンツ（ここでは、第一展開形であるI_6から入るカデンツ）を弾いて提示した。その後、和音及び和声進行についてどんな感じがするかを聞いたものである。和音の提示はピアノで行い、4秒間隔で同じ和音を計3回提示した。提示した和音は、Tであるドミソの「Ⅰ」、Sであるドファラの「Ⅳ」、Dであるシファソの「V_7」である。「Ⅴ」ではなく、よりDの機能が強い「V_7」を採用することにした。和音の提示順はⅠ→Ⅳ→V_7であり、カデンツに依っている。機能はT→S→Dである。しかし、本来V_7の後はⅠとなるがⅠは提示していない。また、和音はいずれも密集配置で提示している（図2）。なお、ここまでの授業においていわゆる聴音[注10]を行ったことはない。

和音についての選択肢は、気をつけをする感じ、バンザイをする感じ、お辞儀をする感



Ⅰ　　Ⅳ　　V_7

図2　和音 密集配置

じ、の 3 つである。和声進行に入る前にも調性の提示を行ってから、和声進行 D→T、D→S を提示した。選択肢は、終わった感じ、ちぐはぐな感じ、の 2 つである。また、T, D, S のそれぞれの機能について、『新装版 楽典 理論と実習』の解説[10]のみで理解することができたかを聞いた。以下、解説を示す。

1　Tonic の機能

主音の性格を強く持ち、主格感、安定感をその調で最も強く示す。

この機能を、最も強く持つ和音は Ⅰ（主和音）である。Ⅵは Ⅰ に準じてこの機能を持ち、Ⅲは使われ方によって、この機能を有する。

2　Dominant の機能

主和音へ進もうとする強い性格を持つ。この性格によって Tonic が規定されるのである。この機能を持つのはⅤであるが、V_7になるとさらに強力になる。Ⅶは Ⅴ に準じてこの機能を持ち、Ⅲは使われ方によって、この機能を有する。

3　Subdominant の機能

Tonic および Dominant の機能とは別の機能を持つ。この機能を最も強く持つ和音はⅣであり、Ⅱは Ⅳ に準じてこの機能を持つ。強力な性格はないが、抒情感、解放感など、聴く人によってさまざまな感じを与えるであろう。

曲中種々の状態によって、この和音の機能を感得すべきである。

和音の機能 解説　出典：石桁真礼生ら（2001）『新装版 楽典 理論と実習』音楽之友社 p. 147

なお、和音の提示順は Ⅰ→Ⅳ→V_7であり、機能は T→S→D となるが、通常は機能について説明するとき、T, D, S の並び順[10) 11)]であることをことわっておく。

その次の回から、身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行った。詳細については、後述する。

そして、事前調査より 3 回後の「音楽基礎Ⅱ」内において、事後調査を行った（対象者 22 名）。事前調査と同様に、和音及び和声進行を提示してどんな感じがするかを聞いたものである。事後調査は、和音の機能について理解することができたかのところは、身体の動きをつけたことにより理解することができたか、という項目へと変更した。なお、データについては研究のみに使用することを説明し、同意を得た。

2．身体の動きをつける

日頃、キーボード・ハーモニーとして弾いている楽曲「こいぬのマーチ」やカデンツ奏を行う際に、和音記号と結びつけた上で、身体の動きをつけて行った。いずれも主要三和音のみでできており、ハ長調、ト長調、ヘ長調で弾いている曲である。例えば、ハ長調の

主和音であるドミソの「Ⅰ」では、気をつけをしながら。属七の和音であるシファソの「V_7」では、お辞儀をしながら。下属和音であるドファラの「Ⅳ」では、バンザイをしながら弾く。問題として「Ⅳ」は、「こいぬのマーチ」のように両手で弾く場合バンザイできないため、胸を反らすようにした。「Ⅳ」をカデンツ奏のように左手のみ弾く場合は、右手をバンザイするようにした。この身体の動きをつける活動は、機能和声感を高めるねらいで行った。機能和声感を理屈ではなく、体感して感じる活動である。

3．選択肢の語句について

和音の選択肢は、気をつけをする感じ、バンザイをする感じ、お辞儀をする感じ、の3つとした。「T」は、「気をつけをする感じ」であるが、「安定した感じ」という語句も考えられた。同様に、「S」は、「バンザイをする感じ」であるが、「伸び上がる感じ」に。「D」は、「お辞儀をする感じ」であるが、「緊張した感じ」という語句も考えられた。終止カデンツにみられるように、「D」→「T」は「緊張」→「弛緩」という性格があるため、前述したように後者の選択肢の方がふさわしいかもしれない。しかしながら、今回は身体の動きをつけることにより機能和声感が高まるのではないか、という仮説を立てた。抽象的な語句よりも、具体的な語句の方がよいのではないかと考え、身体の動きと合う語句にすることとした。

Ⅳ．結果

1．事前調査

事前調査の結果を次に示す（表1－1、表1－2、図3）。

和音の機能（表1－1）について、Tの機能を感じ取ることができた学生は20%であり、Dである「お辞儀をする感じ」と回答した学生が73%であった。Sの機能は77%の学生が感じ取っていたが、Dの機能は57%と約半分にとどまっている。なお、塗りつぶしてあるところが正答率となっている。

和声進行（表1－2）については、D→Tは終止形であり、終わった感じのする進行である。D→Sは、和声学において禁忌とされる進行である。どちらも83%の学生は、感覚的に聴き取っている。

和音の機能について理解することができたか（図3）は、「よく理解できた」が0%、「まあ理解できた」が32%、「あまり理解できなかった」が59%、「まったく理解できなかった」が9%であった。

2．事後調査

事後調査の結果を次に示す（表2－1、表2－2、図4）。

表 1－1　和音の機能　（塗りつぶしのところが正答率）

	気をつけをする感じ	バンザイをする感じ	お辞儀をする感じ
T（Tonic）	20%	7%	73%
S（Subdominant）	17%	77%	6%
D（Dominant）	10%	33%	57%

表 1－2　和声進行　（塗りつぶしのところが正答率）

	終わった感じ	ちぐはぐな感じ
D（Dominant）→ T（Tonic）	83%	17%
D（Dominant）→ S（Subdominant）	17%	83%

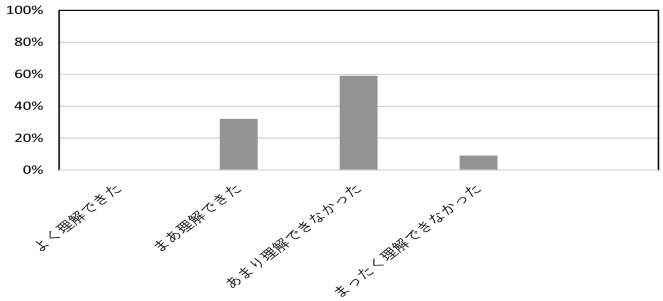


図 3　和音の機能について理解することができたか

表 2－1　和音の機能　（塗りつぶしのところが正答率）

	気をつけをする感じ	バンザイをする感じ	お辞儀をする感じ
T（Tonic）	73%	0%	27%
S（Subdominant）	14%	86%	0%
D（Dominant）	24%	0%	76%

表 2－2　和声進行　（塗りつぶしのところが正答率）

	終わった感じ	ちぐはぐな感じ
D（Dominant）→ T（Tonic）	82%	18%
D（Dominant）→ S（Subdominant）	14%	86%

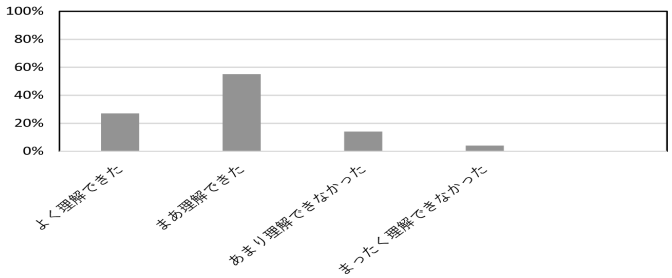


図 4　和音の機能について理解することができたか

和音の機能（表 2－1）について、T の機能を感じ取ることができた学生は 73%であった。S の機能は 86%、D の機能は 76%の学生が感じ取っていた。なお、塗りつぶしてあるところが正答率となっている。

和声進行（表 2－2）については、D→T を聴き取っている学生は 82%であったが、D→S を聴き取っている学生は 86%と若干多くなっている。

和音の機能について理解することができたか（図 4）については、「よく理解できた」が 27%、「まあ理解できた」が 55%、「あまり理解できなかった」が 14%、「まったく理解できなかった」が 4%であった。

3．事前調査と事後調査の比較

まず、和音の機能についての正答率を比較する。事前調査（表 1－1）と事後調査（表 2－1）を比較するために、グラフを示す（図 5）。和音の機能について、事前事後を比較してみると、T, S, D それぞれの機能において、事後の正答率が上がっている。T の機能については 20%から 73%へと大幅に上がっており、S の機能については 77%から 86%へ、また D の機能についても 57%から 76%へと上がっている。そして、事前は回答の項目がばらついている印象があるが、事後についてはそれぞれ 1 項目ずつ回答率 0%の項目が見られる（表 1－1、表 2－1）。

和声進行については、ほとんど変化が見られなかった（表 1－2、表 2－2）。

和音の機能について理解することができたかについて事前調査（表 1－3）と事後調査（表 2－3）を比較するために、グラフを示す（図 6）。事前調査では、T, D, S のそれぞれの機能について、解説[10]のみで理解することができたかを聞いたものである。事後調査では、T, D, S のそれぞれの機能について、身体の動きをつけたことにより理解することができたかを聞いたものである。和音の機能について理解することができたかについて、「よく理解できた」は、事前調査では 0%だったのが、事後調査では 27%であった。「ま

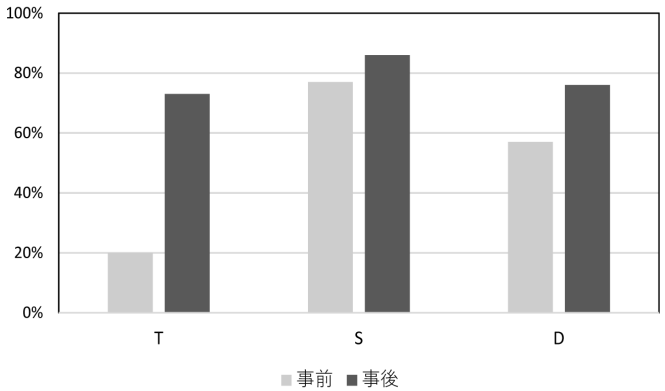


図 5　和音の機能　正答率：比較

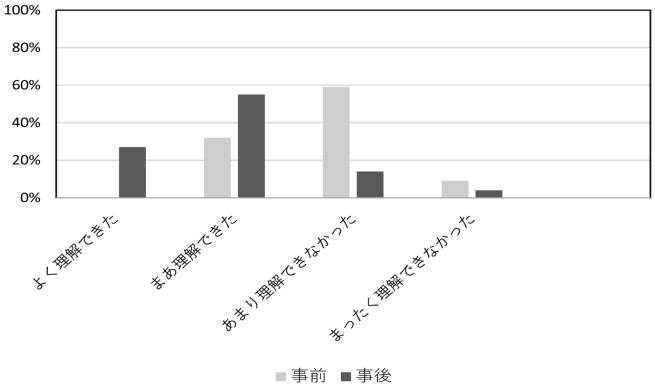


図 6　和音の機能について理解することができたか：比較

あ理解できた」は 32%から 55%へと上がっている。一方、「あまり理解できなかった」は、59%から 14%へと減少し、「まったく理解できなかった」は、9%から 4%へと減少している。

V．考察

1．事前調査

和音の機能（表 1－1）について、T の機能を感じ取ることができた学生は 20%であり、D である「お辞儀をする感じ」と回答した学生が 73%であった。T の機能を持つ I の和音は、最も強くその調を表している。事前調査では、T の機能を 20%の学生しか感じ取れなかった。一方、T の機能を D である「お辞儀をする感じ」と聴き取ってしまった学生が 73%いた。要因として、「気をつけをする感じ」という語句がわかりにくかった可能性も考えられる。今回は身体の動きをつけることにより機能和声感が高まるのではないか、という仮説のもと、抽象的な語句である「安定した感じ」よりも、具体的な語句の方がよいのではないかと考え、身体の動きと合う語句にしている事情がある。語句については、再考する必要があるかもしれない。また、「気をつけ」には注意をする必要があると考えられる。それは、「気をつけ」を教育現場では「気をつけ、ピッ！」というように、両腕を大腿部あたりへつける習慣が見られることである。感覚として、「気をつけ」＝「緊張」という認識になっている可能性も否定はできないと考えられる。

S の機能は 77%の学生が感じ取っていたが、D の機能は 57%と約半分にとどまっている。D の機能について、感じ取れた学生が 57%であったことはやや意外な結果であった。例えば音楽科の授業において、何かの発表の場面において、我が国の教育現場では T→D→T の音楽に合わせてお辞儀をする場面が見受けられるからである。

和声進行（表 1－2）については、D→T は終止形であり、終わった感じのする進行であ

る。D→S は、和声学において禁忌とされる進行である。どちらも 83%の学生が、感覚的に聴き取っている。すっきりと終わった感じがするか、ちぐはぐな感じがするか、1 つの和音ではなく、2 つの連続した和声進行により、感覚的に聴き取りやすかったと考えられた。

和音の機能について理解することができたか（図 3）は、解説のみで理解することができたか、ということである。「よく理解できた」が 0%、「まあ理解できた」が 32%、「あまり理解できなかった」が 59%、「まったく理解できなかった」が 9%であった。「あまり理解できなかった」「まったく理解できなかった」を合わせると 68%の学生が、和音の機能について解説のみで理解することは難しかったと考えられた。そして、解説のみでは日頃弾いている楽曲と結びつけにくかったことも考えられた。

2．事後調査及び事前調査と事後調査の比較

和音の機能（表 2－1）について、T の機能を感じ取ることができた学生は 73%であった。事前調査では、T の機能は 20%の学生しか感じ取ることができなかった。事後調査で大幅に正答率が上がったことは、身体の動きをつけて「こいぬのマーチ」やカデンツ奏を行ったことが、感覚的な理解に有効であったと考えられた。また、事前調査では、T の機能の回答項目がばらついていたが、事後調査では「バンザイをする感じ」と回答をした学生はいなかった。回答が、正答である「気を付けをする感じ」と「お辞儀をする感じ」に絞られていた点も、和音の機能が感じ取れるようになってきたことの一つの裏付けといえるのではないだろうか。

事後調査では、S の機能を 86%の学生が感じ取っていた。事前調査でも、S の機能は 77%の学生が感じ取っていた。他の和音に比べると比較的多くの学生が正答していたが、身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行ってからの事後調査では、S の機能を感じ取れた学生の増加が見られる。また、事前調査では回答項目がばらついていたが、事後調査においては「お辞儀をする感じ」と回答した学生はおらず、回答が 2 項目に絞られている。そして、D の機能は 76%の学生が感じ取っていた。事前調査での正答率は 57%であったことから、D の機能についても事後調査で正答率が上がっている。また、事前調査では回答項目にばらつきがあったが、事後調査においては、「バンザイをする感じ」と回答した学生はおらず、回答が 2 項目に絞られていた。

S と D の機能についても、T の機能と同様に、事後調査において正答率が上がり、回答項目がいずれも 2 項目に絞られている。身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行った結果、和音の機能を感じ取れる学生が増えている。身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行うことで、機能和声感の高まりに一定の有用性があったと考えられた。

事後調査では、和声進行（表 2－2）について、D→T を聴き取っている 82%よりも、D→S を聴き取っている学生が 86%と若干多くなっている。しかし、事前調査において、

D→T、D→S、いずれにおいても83%であったため、目立った変化は見られない。

和音の機能について理解することができたか（図4）については、「よく理解できた」が27%、「まあ理解できた」が55%、「あまり理解できなかった」が14%、「まったく理解できなかった」が4%であった。事前調査では、「よく理解できた」は0%であったのが、事後調査では27%となっている。また、「まあ理解できた」は32%から55%へと上がっている。「よく理解できた」と「まあ理解できた」を合わせると、82%の学生が和音の機能について一定の理解ができたと回答している。事前調査では、「よく理解できた」と「まあ理解できた」を合わせて、32%の学生が和音の機能について一定の理解ができたと回答している。和音の機能についての理解が、32%から82%へと大幅に伸びたことは、身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行ったことに起因すると考えられた。また、机上のみでの学びでは、音楽理論の知識は理解しにくいことも考えられた。

3．総合考察

今回、身体の動きをつけてキーボード・ハーモニーを行ったことにより、機能和声感の高まりに一定の有用性があったと考えられた。そして82%の学生が、和音の機能について理解を得た実感があったことは幸いであった。しかしながら、和音の機能について理解することができたかについて、「あまり理解できなかった」学生が14%、「まったく理解できなかった」学生が4%いる現状がある。和音の機能について、身体の動きをつけても理解が進まなかった学生が一定数いることは問題である。また、和音の機能について、Tの機能の正答は「気をつけをする感じ」であり、73%の学生がTの機能を感じ取っている。しかし、「お辞儀をする感じ」と回答した学生が27%いた。同様に、Dの機能の正答は「お辞儀をする感じ」であり、76%の学生がDの機能を感じ取っている。しかし、「気をつけをする感じ」と回答した学生が24%いた。事後調査では、Tの機能もDの機能も回答は2項目に絞られているが、TとDの機能について回答に迷う学生の姿が浮かび上がる。前述したように、「気をつけ」＝「緊張」という認識になっている可能性がある。どうしたら和音の機能が感じ取れるか、また、調査の選択肢の語句はこれでよいのかについても再考する必要があるだろう。

砂田[9]は、「学生の様子を見ているとヘ長調、ト長調などハ長調以外の調では、和音の機能を考え無いまま演奏していることに気付いた。つまりCコードがあれば調に関係無くC、E、Gを押さえてしまう」と報告している。Cコードであっても、ハ長調であるのか、ヘ長調であるのかで、和音の機能は全く別のものになってしまう。機能和声を理解することは、コード・ネームに結びつけやすくなる利点がある。しかし、機能和声の理解とコード・ネームの学習を混同せずに行っていく必要がある。

ピアノ初学者でも簡易伴奏であれば、多くのレパートリーを獲得できるのではないだろうか。永冨[12]は、「ピアノは和声を司る楽器である」と述べ、伊藤[13]は、「左手の伴奏を一

度和音に変換して弾いてみることによって、曲全体の和音の流れがわかり、楽譜どおりに弾くための橋渡しとなります」と述べている。まずは和音をおさえられること。そして、和音から様々な伴奏形を身につけていくことができるのである。この曲は何調であるか、主要三和音は何であり、その主要三和音を手の感覚で弾くことができる。パッと和音がおさえられれば、左手の伴奏を小節ごとに読んでカタカナでドレミを書く必要は減ると考えられ、音楽的な演奏へとつながるであろう。そして、ある楽曲に対して、取り組みの初期段階において楽曲の構造をつかむことは、楽曲の理解につながり、効率的な練習を可能にすると考えられる。

西尾[14]は、「和音を弾いているにもかかわらず、その和音がどのようなものかわからないという状況が蔓延しているのは残念なことである」と述べている。和音の意味がわかり、曲の構造や流れをとらえ、和音の表情を味わうこと。ここで終わるからこの和音というように、手の感覚で和音をとらえていくことが大切であると考えられる。子どもの歌は、機能和声に基づいて作られた音楽である。シンプルな構成で出来ており、よく用いられる調も大体決まっている。和音の機能を理解し、主要三和音を手の感覚でとらえることが、音楽基礎力の向上、そして音楽的な演奏へつながると考える。

子どもの前で弾き歌いを行うときは、子どもに目配りをしながら行うことが望まれる。どのような様子で、どのような声で歌っているのか、という点に常に気を配ることが理想である。そして、保育者自身が音楽の良さや美しさを感じ取って伴奏をし、歌うことが望まれる。伊藤[15]は、「次の小節で左手の和音がどのように変わるのか（あるいは変わらないのか)、頭の中で『次の和音は…』と響きを想像しながら練習しましょう」と弾き歌いの練習方法について勧めている。このようなキーボード・ハーモニー的な練習の積み重ねが、楽譜通りに弾くことにとらわれすぎない伴奏を可能にするのではないかと考える。香宗我部[16]は、「音楽を正確に、完璧に演奏する保育者が、本当に“よい保育者”なのでしょうか」と指摘している。ときには柔軟に、そして即興的に簡易伴奏で演奏することも必要であると考えられる。また、子どもの声域に合わせて移調奏できる技能があれば、子どもの豊かな表現を引き出しやすくなるのではないだろうか。それには、楽典を土台とした機能和声の理解とキーボード・ハーモニーの技能が大切であると考えられる。本研究において１年次開講の「音楽基礎」に対する示唆が得られた。機能和声の理解がより高まる手だてを考えること、そして理論とキーボード・ハーモニーを有機的に結び付け、演奏につなげる方法を模索することを、今後の課題としたい。

【注】

注 1　西洋音楽の学習において音楽理論の基礎教育のことを指す。音楽理論や視唱・読譜・聴音などの能力を養う。

注 2　音楽理論の初歩的な知識であり、楽譜の読み書きに必要な規則である。

注 3　鍵盤上で和音伴奏をつけること。「鍵盤和声」とも訳される。

注 4　機能和声とは、その和音が置かれた状況によって働きや機能があるとする考え方である。主和音である「Ⅰ」の和音はT（Tonic, トニック）、下属和音である「Ⅳ」の和音はS（Subdominant, サブドミナント）、属和音である「Ⅴ」の和音はD（Dominant, ドミナント）の機能を持つとされる。
注 5　カデンツとは、機能和声における和音進行のことである。
注 6　音階各音上の三和音のうち重要なものを主要三和音と呼ぶ。スリーコードとも呼ばれている。各調の主音・下属音・属音を根音とした三和音であり、和音記号ではローマ数字でⅠ・Ⅳ・Ⅴと記す。属七の和音V_7も含む。
注 7　和声とは、和音の連結や配置の組み合わせのことである。
注 8　外国曲。作曲者は不明。「みつばちマーチ」とも呼ばれている。
注 9　西洋音楽で使われる調は、12の長調と12の短調、合わせて24調ある。
注 10　聴音とは、耳で聞いた音（旋律や和音）を記譜することである。ソルフェージュに含まれる。

【参考文献】

1）「平成30年度 名古屋経営短期大学 教育課程表」『平成30年度 名古屋経営短期大学 学生便覧』p. 11
2）『名古屋経営短期大学シラバス』
http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2018_52600021.html（2018年11月6日閲覧）
3）同上 http://syb.nagoya-su.ac.jp/syllabus/html/2018_52600022.html（2018年11月6日閲覧）
4）五味克久・神原雅之（1992）「教員養成機関におけるキーボード・ハーモニーについての研究（その1）」『神戸大学教育学部研究集録』第69巻 pp. 153-161
5）高山真琴（2018）「教科指導に必要なピアノ演奏力の育成―機能和声理論に基づくスタートプログラムについて―」『國學院大學人間開発学研究』第9号 pp. 73-82
6）石田陽子（2017）「ピアノ実技指導でのキーボード・ハーモニー導入の試み―その有効性と課題を検証する―」『四天王寺大学紀要』第63号 pp. 289-304
7）鷲野彰子（2018）「「弾き歌い」曲に占める主要三和音の割合―ピアノ初学者のための「弾き歌い」指導方法再考の可能性―」『福岡県立大学人間社会学部紀要』第26巻第2号 pp. 139-150
8）西田直嗣（2005）「和音学習の鍵―楽曲における機能和声とコードの相互性に関する考察―」『群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター教育実践研究』第22号 pp. 127-136
9）砂田眞理子（2017）「ピアノ初心者の心を開く子供の歌の実用伴奏法―和声学に於けるカデンツとコード・ネームによる伴奏付けの比較から簡易伴奏の可能性を探る―」『札幌大谷大学紀要』第47号 pp. 143-155
10）石桁真礼生ほか5名（2001）『新装版 楽典 理論と実習』音楽之友社 p. 147
11）島岡譲ほか12名（1964）『和声 理論と実習』音楽之友社 p. 37
12）永冨正之（1981）「勉強の第一歩」淺香淳ほか5名（編）『最新ピアノ講座 第3巻 ピアノ初歩指導の手引Ⅰ』音楽之友社 p. 127
13）伊藤真（2011）「子どもの美しい歌声をひきだすピアノ伴奏法」吉富功修・三村真弓（編）『改訂3版 幼児の音楽教育法 美しい歌声をめざして』ふくろう出版 p. 36
14）西尾洋（2017）『鍵盤和声 和声の練習帖 手の形で和声感を身につける』音楽之友社 p. 36
15）伊藤真（2011）「音楽科教育のテクニック」吉富功修・三村真弓（編）『第3版 小学校音楽科教育法 学力の構築をめざして』ふくろう出版 p. 150
16）香宗我部琢（2009）「幼稚園で活きる保育技術」諏訪きぬ（編）『幼稚園実習ガイドブック―実習の中で磨かれる“技と心”―』新読書社 p. 84